

巻頭言

欠乏から渴望へ

美智子皇后 『橋をかける』 を読む

間藤 侑

私の手元に「猫を食わずにすんだ話」という一文のコピーがあります。筆者は現都知事の石原慎太郎氏、彼の大学同期の卒業四十周年記念文集に寄稿した、寮生活のエピソードが綴られています。私の親戚に石原氏の無二の親友がいて、時々こういうものが手に入ります。全く同時代に生きていた私自身の寮生活の青春を、ほとんどそっくり映しているように懐かしく読みました。その中に、彼が現代フランスの哲学者レイモン・サロンの言葉を引用しているところがあります。

「青春が青春たる不可欠の条件である貧困と欠乏（サロン）はまだまだ十分に寮生の青春を満たしてくれていたし、今思えば思うほど、欠乏の充足への願望は甘美であり、『貧困は至上の贅沢』でもあった」と書いています。寮近辺に出没する猛猫を遂に仕留めて「猫汁」にし、蛋白質の不足を補うというこの文のテーマになる話も、「貧困と欠乏こそ青春の不可欠の条件」という表現の線上にあるのですが、こうした当時の学生の精神生活の一面を象徴する言葉は、今の学生たちにはかなり解読困難かもしれません。

幼児教育とは全く無関係なこんな文章を思い出したのは、実は美智子皇后の『橋をかける』（すえもりブックス）を読んでいたときでした。この本はちょうど一年前、昨年九月のIBBY（国際児童図書評議会）世界大会インド大会に寄せた、美智子皇后のビデオによる英語の基調講演の完全収録版です。この講演の、平易な内容でありながら気品にみちた語り口と、現代という困難な時代への思いをこめたメッセージが、大きな感銘を多くの人々に与えた記憶はまだ新鮮ですが、「子ども時代の読書の思い出」という副題からもわかるように、ご自分の子どもも時代の読書を中心に、三人の母となつてからの絵本や児童文学との出会いなどを、実に率直に語られたものでした。それは、どこのふうの家庭にもある親と子の「物語り」と、特に変わってもいらないと感じま



す。

美智子皇后の少女時代もまた、先の石原氏や私の子ども時代と重なります。「教科書以外にほとんど読む本がなかったこの時代」とか、「この時期、私は本当に僅かしか本を持ちませんでした」などという言葉は、そのまま当時の子どものすべてに当てはまるものでもあったのです。読書の楽しみを知らなかったり、また本があってもそれを読みこなすだけの力がある程度無ければ、「本への激しい渴望」は生まれなかつただろうとも書かれています。「欠乏」感の生み出すエネルギーは、僅かに出会う何冊かの本からも、人生や自然へのさまざまな疑問や感受性をいかに多く手に入れることができるかを、具体的な経験から例示されていることに、深い共感を覚えました。

「どのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙には、それなりの重さがあります」「悲しみの多いこの世を子供が生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われると共に、喜びを敏感に感じとる心、又、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思います。そして最後にもう一つ、本への感謝をこめてつけ加えます。読書は、人生の全てが、決して単純ではないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかねばならないということ。人と人との関係においても、国と国との関係においても」という最後に記されたいくつかの言葉もまた、胸に重く響くものでしたが、それは、精神的にも成熟した今辿り着いた今心境では決してなく、すでに子ども時代の読書を

通して鋭く感じておられたことが、随所にかがわれます。

そうした心の土台を、子ども時代のさまざまな体験の中に発見するとき、あらためて一般的な意味での、人格形成にかかわる子ども時代の大切さを思いました。また、美智子皇后の読書の記憶にうかがわれる感性は、詩人や芸術家などの幼少期のエピソードと共通するものを感じることもできましたが、やはりそれは、本への渴望が生み出す読書の喜び体験と無縁ではなかったと思います。

もちろん、本の世界はあくまで書かれたものにすぎませんから、そこにだけ閉じこもっているのは、「決して単純ではない」現実の豊かさと触れ合うことができません。しかし、書かれたものが問い掛ける疑問や感動が、いかに現実をより深く広くとらえる知性や感受性を育むことかを、『橋をかける』は伝えてくれます。しかしあまりにも本が身近に溢れている今の時代、渴望が生み出す出会いや心の贅沢が、逆に難しくなっていくことを怖れます。一冊の本を与え、また読み聞かせることに、大人はもつと注意深くする必要があります。かもしれません。

(新潟青陵女子短期大学)

